

図2：日本選手団の男女別のメダル数

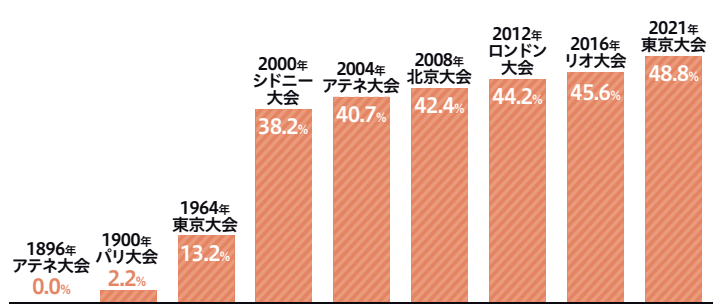
メダル数	女				男			
	金	銀	銅	合計	金	銀	銅	合計
1964	1	0	1	2	15	5	7	27
2000	2	6	5	13	3	2	0	5
2004	9	4	4	17	7	5	8	20
2008	5	2	5	12	4	5	4	13
2012	4	6	7	17	3	8	10	21
2016	7	1	10	18	5	7	11	23
2021	14	8	8	30	12	5	8	25

参照：内閣府「男女共同参画白書 平成30年版」、公益財団法人 笹川スポーツ財団「【2020東京オリンピック】競技・日程別 日本のメダル獲得一覧」  
※男女混合競技も含めると、獲得総メダル数は58枚。

41・7%となりました。

選手の中でも、日本では女子ピックでも、日本では女子選手の比率が史上最高の

図1：オリンピック(夏季大会)出場選手に占める女性選手の割合



参照：内閣府「男女共同参画白書 平成30年版」、IOC公式HP

## ジェンダー平等の実現に向けて

今大会での日本の実績や取組を振り返ると、オリンピックでは、女子種目で金メダル14枚を含む合計30枚のメダルを獲得し、夏季大会で史上最多を記録しました。同時に、約20年ぶりに女子種目でのメダル獲得数が男子種目でのメダル獲得数を上回りました(図2)。また、パラリンピックでも、日本では女子選手の比率が史上最高の

しかし、前向きな変化の一方で、男女共同参画の実現に向けた課題は依然として存在します。例えば、今大会に参加したコーチの女性割合は、オリンピックで約13%、パラリンピックで約20%となっており、女性コーチの増加に向けた取組が求められています(※1)。また、日本においても、女性の指導者やスポーツ団体における女性の役員が少ないことが指摘されており、中央競技団体を対象に行われた調査(※2)によると、全体の役員数の約8割強を男性が占めています。さらに、オリンピック・パラリンピックを含めた多くの女性のアスリートは、出産・育児と競技生活を両立させることに困難を感じています。また、女性のアスリートが直面しがちな健康課題(※3)、性的画像被害等も深

刻な問題です。こうした現状を踏まえて、今大会では、選手村の総合診療所内に女性アスリート科が設置されたり、会場入場者の禁止行為に性的ハラメント目的の撮影が明記されるなどの措置がとられました。

世界中からトップクラスの選手が集い、しのぎを削るオリンピック・パラリンピック。だれもが安心して競技に打ち込める環境づくりが進められています。

※1「TOXYO2020」多様性と調和におけるジェンダー平等報告書、公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、2021年12月。  
※2「中央競技団体現況調査2020年度」、公益財団法人笹川スポーツ財団、2021年3月。  
※3 エネルギー不足、無月経、骨粗鬆症が代表的な課題。「女性アスリートの三主徴」とされる。

### 東京2020大会におけるジェンダー平等/多様性と調和の推進について

(公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会)



こちらをチェック

プラスアルファ調べてみよう

今大会におけるジェンダー平等の取組や多様性の実現に向けた理念等を知ることができます。

